

ISSN 2186 – 3989

ニュースにおける代名詞の使用について

轟 里香

On the Use of Pronouns in Japanese News Programs

Rika Todoroki

北 陸 大 学 紀 要
第47号(2019年9月)抜刷

ニュースにおける代名詞の使用について

轟 里香*

On the Use of Pronouns in Japanese News Programs

Rika Todoroki*

Received April 26, 2019

Accepted May 17, 2019

Abstract

The aim of this article is to consider the use of Japanese personal pronouns in TV news programs, by comparing them with newspapers.

Todoroki (1998) shows that there are differences between personal pronouns in Japanese and those in English. As one of the characteristics of Japanese personal pronouns, they are rarely used in TV news programs or newspapers. Including this linguistic phenomenon, Todoroki (1998) compares personal pronouns in Japanese with those in English, which provides an analysis of personal pronouns based on the theory of territory of information developed in Kamio (1990) and proposes a functional constraint on the occurrence of personal pronouns in Japanese.

On the other hand, there are some profound changes in the language used in Japanese TV news programs, which are not found in Japanese newspapers. For example, elements which has an important role of identifying the main point of the news at hand are often moved rightward in those programs (Todoroki 2015). Therefore, the language used in TV news programs shows different characteristics from that in newspapers.

This article considers whether or not there is a change in the use of personal pronouns in Japanese TV news programs and newspapers. Although the language used in TV news programs shows a variety of different characteristics from newspapers, it has not been changed concerning personal pronouns. They are still rare both in TV news programs and in newspapers. This article clarifies the reason personal pronouns hardly appear in TV news programs and they remain similar to newspapers in this point despite the fact that the language used in them shows a lot of differences from that in newspapers.

1. 導入

本論文は、英語と日本語の人称代名詞の相違、及び日本語のテレビニュースでの人称代名詞の使用について考察する¹。

*国際コミュニケーション学部 Faculty of International Communication

従来、日本語の新聞やテレビのニュース番組²において、代名詞が使用されることはほとんどなかった。轟（1998）は、この点を含む日本語の人称代名詞の特性を機能的観点から分析し、日本語の人称代名詞に対する制約を提案した。

一方、日本語のテレビのニュース番組で用いられる言語には、従来見られなかったような現象が見られる。その中に、文の要点や必須の要素を後ろのほうに動かしたり省略したりする現象がある。轟（2007）はこのような言語現象を「要点の後置・省略」と呼んでいる。この現象は、テレビニュースに特有の現象であり、テレビニュースを新聞記事と区別する要因の一つである。

テレビニュースにおけるこのような現象の変化を踏まえ、本論文は、従来新聞やテレビのニュースで見られなかった日本語の代名詞の使用に関しても、テレビニュースにおいて新聞記事と異なる現象が見られるかどうかを考察する。

本論文の構成は次のようなものである。2 節では、日本語の新聞やテレビのニュース番組において、従来、代名詞が使用されることがほとんどなかったことを指摘する。3 節では、轟（1998）の議論を基に、ニュースと代名詞の問題を含む日本語の代名詞の特性を見る。4 節では、近年のテレビニュースにおける、新聞記事とは異なる言語現象を挙げる。5 節では、代名詞の使用に関し、近年のテレビニュースに変化が見られるかどうかと、その理由を考察する。6 節では、本論文のまとめを行う。

2. ニュース報道における代名詞

従来、日本語のニュース報道において、代名詞が使用されることはほとんどなかった。まず、新聞記事についてみてみよう。(1) は 1990 年代の新聞記事の例である。

- (1) a. Hashimoto is apologizing in hopes of containing the political damage caused by Sato's appointment. Faced with a growing national backlash, Hashimoto was forced to let him go and publicly admit his misjudgment.

(Asahi Evening News, September 22, 1997, 下線は筆者)

- b. 橋本龍太郎首相は 22 日、首相官邸で佐藤孝行総務庁長官から辞表を受け取り、辞任を了承した。首相は・・・世論の厳しい批判を受けて、佐藤氏に「自発的な辞任」を要請。佐藤氏も「これ以上国政を混乱させるのは忍び難い」として受け入れた。

(『朝日新聞』1997 年 9 月 23 日、轟 1998: 80)

(1a,b) は同じ内容の英文と日本語文のニュース記事である。(1a) の英文の記事の場合は代名詞が現われるが、(1b) の日本語文の場合は代名詞が現われない。日本語の記事の方はこの記事全体を見ても代名詞は一度も使われていない。

一方、新聞においても、いわゆるコラムでは代名詞が現れることがある。

- (2) 以前、この欄で竹内浩三という詩人、45 年に 23 歳で戦死した詩人のことを紹介した。彼の未発表原稿が昨年 11 月に発見され、季刊誌『環 2003 年冬号』（藤原書店）に紹介されている。

(「天声人語」『朝日新聞』2003 年 2 月 17 日、下線は筆者)

このようなコラムは、報道の記事とは種類が異なり、随筆などと同じ種類の文章に分類されると考えられる。言うまでもなく、随筆においては代名詞が用いられることは稀ではなく、新聞

のコラムにおいても (2) のように代名詞が出現することがある。よって、新聞における (2) のような文章と、(1b) のような報道の記事の文章は分けて考える必要がある。(1b) のような報道の記事においては、代名詞の使用例はほとんど見られない。

テレビのニュースにおいても、従来、代名詞が用いられることはほとんどなかった。筆者が調査した 2007 年までのニュースにおいて³、アナウンサーあるいはキャスターがニュース原稿を読む形式の部分では、代名詞の使用は観察されなかった。ニュースにおいて代名詞の出現が見られるのは、以下のような文脈においてである。

(3) 三宅 (キャスター) : そのキリエンコというのはどういう人物なんですか？

上田 (解説委員) : 彼がこれまで話したことからある程度予想はつきます。

(「おはよう日本」、NHK、1998 年 4 月 8 日放送、轟 1998: 86)

(3) は、ニュース番組の中で解説委員とアナウンサーが会話形式のニュース解説を行っていた際のやり取りである。ここで、解説のテーマとなっている人物を指して、解説委員のみが「彼」を使っている。

3. 日本語における代名詞に対する制約

前節では、日本語の新聞やテレビのニュース報道において従来、代名詞がほとんど用いられなかったことを見た。轟 (1998) は、この点を含む日本語の人称代名詞の特性を機能的観点から分析し、日本語の人称代名詞に対する制約を提案している。この節では、轟 (1998) の議論を概観する。

3.1 日本語の代名詞の特殊な振る舞い

日本語の人称代名詞 (「彼」「彼女」等) は、英語の人称代名詞 (“he”, “she” 等) とはかなり異なった振る舞いを示す。

英語の代名詞 “he” は、次の例のように照応的に用いられる。

(4) If John_i is around, he_i will do it. (Kuno 1987: 31)

(4) では英語の代名詞 “he” が “John” を指して照応的に使われている。同様に、以下の例では、日本語の代名詞が、照応的に使われており、英語の代名詞と類似しているように見える。

(5) トーマス・クーンもまた、「科学革命」や「パラダイム」という概念によって、知の非連続的な歴史観を唱えた人物として知られています。彼もまた、従来の科学史に異論をと
なえ、それが一方では科学的法則や理論の発見の羅列に、他方では発見の障害となった
迷信や俗信の告発に終わっていると批判しています。

(増田 1995: 233-234、下線は筆者)

(5) では日本語の代名詞「彼」が照応的に用いられているように見える。

一方、「彼」「彼女」について、次のような日本語辞書の記述がある。

- (6) a. 「彼」: 明治以降、西欧語の三人称男性代名詞の訳語として、口頭語に用いられるようになった。・・・明治以降に同じく訳語として定着していった「彼女」との間で、しだいに男女の使い分けをするようになったと考えられる。
- b. 「彼女」: 幕末から明治初期にかけて、西欧語の三人称女性代名詞の訳語として男性をいう「彼」に対して「彼女」の表記が現われる・・・。
- (『日本国語大辞典』『日本国語大辞典第二版』『彼』『彼女』の項)

(6)によれば、日本語の「彼」「彼女」は英語の“he”, “she”の訳語として当てられたものであることになる⁴。したがって、英語の代名詞と一見類似した照応的用法を持つことは当然のことと言える。

それにもかかわらず、日本語の代名詞には、英語の代名詞とはかなり異なる振舞いが見られる。中村(1989)によれば、英語の代名詞“he”は、male human beingであればどんなものでも指示物となり得る。これに対し、日本語の代名詞「彼」は male human being であれば何でも指示物になれるというわけではない。

轟(1998)は日本語の代名詞と英語の代名詞の相違に関し三点を指摘しているが、その一つに、日本語の代名詞ではその指示物と話し手との個人的関係(多くの場合親しい関係)が前提されることが多いという現象がある。話し手と指示物との間に個人的関係がないことが明らかな場合、代名詞はほとんど用いられない。轟(1998)はそのことを示すものとして、新聞やテレビのニュースにおいて代名詞がほとんど用いられないことを挙げている。前節で述べたように、英文の記事の場合は代名詞が現われるが、日本語文の場合は代名詞が現われない。このような新聞記事における英語と日本語の違いを、轟(1998)は、日本語において話し手あるいは書き手と指示物との個人的関係がないことが明らかな場合代名詞が使われない現象としている。

日本語の代名詞と英語の代名詞の相違として轟(1998)が指摘する三点のうちの他の二点は以下のとおりである。まず、話者にとって誰か分からない人物を代名詞の指示物にするのは難しいという点が挙げられる。

- (7) a. Who is he?
b. Who are they?
- (8) a. ?*彼はだれですか?
b. ?*彼らはだれですか?
- (9) a. あの人はだれですか?
b. あの人はだれですか?

轟(1998: 79)

(7)のように英語ではだれかわからない人を指示するために代名詞“he”, “they”を用いることができる。これに対し、(8)が示すように、日本語で同様の疑問文に代名詞を使った場合不自然になる。日本語においてだれかわからない人を指示するときは、(9)のような指示代名詞と「人」を合わせた形の方がずっと自然である。このように、日本語の代名詞は、話者にとって誰か分からない人物を指示物にするのは困難である。

日本語の代名詞に関わるもう一つの現象として、地位(social status)のより高い指示物には通常用いられないという点が挙げられる。例えば、大学生が教授を指して「彼」を使うことは公式の場では許されない。このことは、次の例文にも示されている。

- (10) 僕の妹_iはメアリーが昨日 $\left\{ \begin{array}{l} *自分_i \\ 彼女_i \end{array} \right\}$ に教えてやったソネットをいつも暗唱している。
(澤田 1993: 314)

- (11) 吉田先生_iはトムが { *自分_i }
先生_i } に茨木のり子の詩集をさし上げた時、大変お喜びになりました。

(ibid., 314)

澤田 (1993) は、これらの例文を再帰代名詞の「自分」が出現できる条件に関する議論の中で挙げているが、本稿で指摘したいのは、これらの例文において「自分」と対になっている選択肢である。(10) で「僕の妹」が先行詞の場合は「自分」と「彼女」が対になっているが、(11) で「吉田先生」が先行詞の場合は「自分」と対になっているのは「彼」ではなく「先生」となっている。このことについて澤田は何も述べていないが、(11) で「彼」ではなく「先生」が用いられている理由は、「彼」を用いると不自然となるためと考えられる。「大変お喜びになりました」という表現が使われていることから、この文を述べている話者は、吉田先生より地位が低い人物と判断できる。したがって、地位がより高い「吉田先生」を指して代名詞「彼」を使うと不自然になるため、「先生」が用いられているのであろう。

このように、日本語の代名詞は英語の代名詞とは異なり、単に照応的に用いられるわけではないことが分かる。その使用には何らかの制約があるのである。そして、日本語の代名詞に関わる現象の中に、本論文で扱う、ニュース報道において代名詞が使用されない、という現象が含まれている。

3.2 情報のなわ張り

前節で指摘した日本語の代名詞の特殊な振舞いに関し、轟 (1998) は、神尾 (1990) の「話し手の情報のなわ張り」という概念を用いた説明を試みている。

まず、神尾 (1990) の「情報のなわ張り」という概念について概観する。神尾は、言語表現が表わす情報がだれに関わりをもつものか、あるいはだれに属するものかという点から言語表現が表わす情報を分析した。

- (12) a. 太郎は病気だ。
b. 太郎は病気らしい。 (神尾 1990: 5,6)

神尾によれば、(12a) の「太郎は病気だ」という文を用いられるのは、太郎の近親者や太郎の病気について医者から詳しく聞いた人などに限られる。それ以外の人は同じ情報を表わすのに (12b) の「太郎は病気らしい」のような表現を使わなければならない。これは、太郎が病気であると言う情報が話し手に属するものかどうか言語表現の違いによって表されるためである。神尾は話し手または聞き手と言語表現が表わす情報との間の関係に「近」と「遠」という概念を導入した。

- (13) 話し手または聞き手と文の表わす情報との間に次元の心理的距離が成り立つものとする。この距離は<近>および<遠>の2つの目盛りにより測定される。

(ibid., 21, 下線は筆者⁵⁾)

(12a) の表現を使うとき太郎が病気だという情報は話し手に「近」であるのに対し、(12b) の表現を使うときこの情報は話し手に「遠」であることになる。このような情報の「遠」「近」という概念を用いて神尾は「情報のなわ張り」を次のように定義している。

(14) <Xの情報のなわ張り>とは、(13)によりXに<近>とされる情報の集合である。ここで、Xは話し手または聞き手とする。(ibid., 21)

(12a) では太郎の病気という情報は話し手⁶の情報のなわ張りに属し、(12b) では話し手の情報のなわ張りに属していないことになる。

「情報のなわ張り」は丁寧さの問題と非常に密接な関係がある。すなわち、話し手が自分のなわ張り外にある情報をあたかも自分のなわ張り内にあるかのように述べると非礼になる可能性が高くなる。

(15) 吉田さんは3時から会議があります。

(ibid., 232)

もし話し手が「3時からの会議」に何の関係もない部外者であれば、(15)は話し手が自分の情報のなわ張りに属していない情報をあたかも自分の情報のなわ張りに属しているかのように述べることになり、差し出がましく押しつけがましい発話となり得る。

神尾は(12)や(15)の場合のように、ある文の表わす情報とその文の全体的文形との間の関係を論じている。すなわち、文形の中には、直接形のようにその情報がだれに「近」であるのか示す文形がある。一方、文の一部を成す単語や句にもそれ自身のなわ張り関係を表現するものがある。そのような語句に関し、次のような仮定が行われている。

(16) 話し手(および稀には聞き手)と文の一部を成す語句の表わす情報との間に一次元の心理的距離が成り立つものとする。この距離は原則として「近」および「遠」の2つの目盛りにより測定される。

(17) <Xの情報のなわ張り>とは、(16)によりXに<近>とされる情報の集合である。ここで、Xは話し手または聞き手とする。

語句の場合(16)の仮定に基づいて(17)の「情報のなわ張り」の定義が適用されることになる⁷。

神尾は「話し手の情報のなわ張り」を示す語句を幾つか挙げているが、人称代名詞については述べていない。轟(1998)は、日本語の代名詞を、「情報のなわ張り」を示す語句に属するものとし、日本語の人称代名詞の機能的特性として(18)を提案している。

(18) 日本語の人称代名詞は、その指示物に関する情報が「話し手の情報のなわ張り」に属することを標示する。

(轟 1998: 83)

(18)により、前節で指摘した現象を説明することができる。以下では、本論文の議論の中心である、ニュース報道における代名詞との関わりを見る。

日本語の代名詞は、新聞記事などニュース報道では通常用いられない。これは、日本語の代名詞においては話し手と代名詞の指示物との個人的関係が前提されることが多いという点と関わっていると見ることができる。(18)により日本語の人称代名詞は、その指示物に関する情報が「話し手の情報のなわ張り」に属することを標示するので、話し手と代名詞の指示物との個人的関係が前提されることになる。話し手と代名詞の指示物との個人的関係が前提されない場合は、代名詞を使うと不自然になる。新聞記事などニュース報道では、話し手(ニュースキャスターやアナウンサーなど)と指示物との個人的関係はない⁸。したがって、ニュース報道で

は代名詞は使用されないことになる。

- (19) 橋本龍太郎首相は 22 日、首相官邸で佐藤孝行総務庁長官から辞表を受け取り、辞任を了承した。首相は・・・・・・世論の厳しい批判を受けて、佐藤氏に「自発的な辞任」を要請。佐藤氏 (??彼) も「これ以上国政を混乱させるのは忍び難い」として受け入れた。

(ibid., 83)

このように、新聞記事において代名詞を使うと不自然となる。同様に、テレビニュースにおいても、これまで、代名詞の使用はほとんど見られなかった。これに対し、前節で述べたように、以下のような文脈において、ニュース番組中での代名詞の出現が見られた。

- (20) (= (3)) 三宅 (キャスター) : そのキリエンコというのはどういう人物なんですか？
上田 (解説委員) : 彼がこれまで話したことからある程度予想はつきます。

この現象も、(18) の制約を使って説明できる。(20) は、ニュース番組の中で解説委員とアナウンサーが会話形式のニュース解説を行っていた際のやり取りであり、ここで、解説のテーマとなっている人物を指して、解説委員のみが「彼」を使っている。この場合、解説委員は話題となっている人物に関する情報を自分の専門的知識としてアナウンサーおよび間接的に視聴者に提示していると考えられる。したがって、話題になっている人物は解説委員の情報のなわ張りに属していると考えられる。このように考えれば、この場合もやはり (18) に基づいて代名詞「彼」が使用されていると言える⁹。

4. 近年のテレビニュースにおける言語現象

前節で指摘したように、従来、日本語の新聞やテレビのニュース報道においては、代名詞の使用はほとんど見られなかった。本論文の目的は、この点で現在のテレビニュースに変化が見られるかどうかを考察することである。そうする必要があるので、轟 (2014) が指摘するように、近年のテレビニュースにおいて、新聞記事とは異なる様々な言語現象が見られるためである。このことを示すため、以下では、そのような言語現象のうちの「要点の省略」に関し、テレビニュースと新聞記事とを比較し、テレビニュースにおいて新聞記事とは異なる言語現象が生じていることを示す。

近年のテレビニュースにおいては、しばしば、あるニュース項目の中で最も重要な情報を表す文が、第二文以降に置かれる。次の例を見てみよう。

- (21) では、次です。巨大な自動車運搬船が関係した可能性が出てきました。こちら、きのう宮城県沖で発見されたマグロ漁船の船首部分です。船長は今も行方不明のままです。当時現場海域を外国船籍の自動車運搬船が航行していたことが分かり、海上保安本部が詳しい状況を調べています。宮城県金華山の沖合 300 キロ。浮かんでいるのは、2 つに割れた漁船。その船首部分です。さらに、離れたところには、沈没しかかった船尾部分。高知県須崎市のまぐろはえ縄漁船、第七勇仁丸が 2 つに割れていました。きのう午前 10 時過ぎ、遭難信号を発信。船長の義澤宏志さんが行方不明となっています。海上保安本部によりますと、救助された乗組員は、自分たちの漁船に大きな船が衝突してきたと話しているということです。

(「ニュースウォッチ 9」NHK、2013 年 6 月 24 日放送)

このニュース項目の冒頭文「巨大な自動車運搬船が関係した可能性が出てきました。」は、ニュースにおける要点であるいわゆる 5W1H に属する情報が欠けている。このニュースは、これが放送された前日に起こった事件に関連したものであるが、その事件を報道した新聞記事は次のようなものである。

- (22) 23 日午後 1 時ごろ、宮城県金華山の南東約 300 キロの沖合で、海上保安庁の航空機が、船体が 2 つに割れて転覆している高知県須崎市のマグロはえ縄漁船、第 7 勇仁丸 (19 トン、乗組員 9 人) を発見した。第 2 管区海上保安本部 (宮城県塩釜市) によると、船長の義沢宏志さん¹⁰ (52) が行方不明になっている。大型船と衝突したとの証言があり、船の行方を調べている。

(「漁船転覆、船長が不明」『朝日新聞』(東京) 2013 年 6 月 24 日夕刊 15 面)

(22) の第一文はいわゆる 5W1H に属する情報を含んでいる。(21) で (22) の第一文にあるのと同じ情報が現れている部分に下線を引くと、以下のようになる。

- (23) では、次です。巨大な自動車運搬船が関係した可能性が出てきました。こちら、きのう宮城県沖で発見されたマグロ漁船の船首部分です。船長は今も行方不明のままです。当時現場海域を外国船籍の自動車運搬船が航行していたことが分かり、海上保安本部が詳しい状況を調べています。宮城県金華山の沖合 300 キロ。浮かんでいるのは、2 つに割れた漁船。その船首部分です。さらに、離れたところには、沈没しかかった船尾部分。高知県須崎市のまぐろはえ縄漁船、第七勇仁丸が 2 つに割れていました。きのう午前 10 時過ぎ、遭難信号を発信。船長の義澤宏志さんが行方不明となっています。海上保安本部によりますと、救助された乗組員は、自分たちの漁船に大きな船が衝突してきたと話しているということです。

(轟 2013: 178)

(23) を見ると、音声言語であるテレビニュースの第一文で省略された情報が、第二文以降で述べられているが、まとまった文の形で述べられるのではなく、断片的な形で少しずつ述べられていることが分かる。

このように、近年のテレビニュースにおいては、新聞記事とは異なる言語現象が見られる¹¹。このことを踏まえ、次節では、代名詞の出現に関し、テレビニュースにおいて新聞記事とは異なる変化が見られるかどうかを考察する。

5. 近年のテレビニュースにおける代名詞の使用状況

5.1 新聞とテレビの比較

この節では、代名詞の出現に関してテレビニュースに変化が見られるかどうかを述べる。2 節で述べたように、従来新聞やテレビのニュース報道などの場合代名詞はほとんど用いられなかった。

テレビニュースについて見る前に、まず、近年の新聞記事を見てみよう。

- (24) Mr. Abe announced this month that he would visit Pearl Harbor. Japan's Foreign Ministry, in news briefings, indicated at the time that he would be the first sitting Japanese prime minister to visit Pearl Harbor, the site of the surprise attack on a United States naval base 75 years ago. It turns out, though, that he might not be the first, or even the second. It now appears that he is the fourth.

(*The New York Times*, December 27, 2016, LexisNexis Academic, 下線は筆者)

- (25) 米ハワイを訪問中の安倍晋三首相は 27 日午前（日本時間 28 日早朝）、太平洋戦争の戦端が開かれた真珠湾で慰霊に臨む。日本の歴代首相はこれまでも、戦地などで「慰霊」や「和解」を試みてきたが、計画通り運ばなかったことも多い。安倍首相が真珠湾訪問に踏み切れたのは、右派勢力の支持も得る政権基盤や安定した日米関係が影響しているようだ。

（『朝日新聞』（東京）2016 年 12 月 28 日 3 面）

(24) (25) はほぼ同じ内容の英文と日本語文のニュース記事である。(24) の英文の記事の場合は代名詞が現われるが、(25) の日本語文の場合は代名詞が現われない。実際、日本語の記事の方はこの記事全体を見ても代名詞は一度も使われていなかった。このように、日本語では英語と違い話し手あるいは書き手と指示物との個人的関係がないことが明らかな場合は代名詞が使われない。この点は、新聞記事においては、近年においても同じ状況であることがわかる。

一方テレビニュースにおいても、代名詞に関しては、目立った変化は見られない。代名詞の出現はほとんど見られない状況である。このように、代名詞の使用に関しては新聞記事と同じで、ほとんど使用がない。テレビニュースにおける言語が新聞記事と大きく異なる変化を示していることを考えると、代名詞の使用に関してはなぜ新聞記事と同じ状況なのかという疑問が生じる。次節以降で、このことをどのように説明できるかを見る。

5.2 テレビニュースにおける言語変化の要因

テレビニュースで代名詞が用いられるようにならない理由を知るため、まず、轟 (2014) の議論に基づき、テレビニュースにおける言語変化の要因を見てみよう。

4 節で述べたように、近年のテレビニュースにおいては、しばしば重要な情報が後に置かれる。轟 (2013) は、このようなニュースの構造と、文学作品でしばしばとられる手法との類似性を指摘している。例えば、2013 年の芥川賞を受賞した小説『爪と目』に関して、次のように述べられている。

受賞作「爪と目」は、妻を亡くした男性と同居を始めた愛人と、亡くなった妻の幼い娘との間に漂う、不穏な緊張感を描いた物語。受賞時、書き出しの一文が話題をさらった。「はじめてあなたと関係を持った日、帰り際になって父は『君とは結婚できない』と言った——。思わず読み直してしまうような違和感は、「わたしは三歳の女の子だった」という説明で「娘が語り手なのか」と解消されるけれど、怖いのはそこから。幼い「わたし」が年上の「あなた」の行動を淡々とつづる文章は、愛人が常に娘から監視されているような不気味な錯覚を生み、その先に壮絶なラストシーンが待ち受ける。

（「どう書くか 沈黙の 1 年」『朝日新聞』2013 年 11 月 30 日、轟 2013: 172）

この小説の第一文は、必須要素の省略を含んでおり、「思わず読み直してしまうような違和感」を生んでいる。それが、その後の説明で「解消される」という構造になっている。同様に、(21)

においては、ニュースにおける要点が冒頭部分で欠けており、省略された情報が、第二文以降で断片的な形で少しずつ述べられている。これは、上に述べた小説で取られている構造と非常に類似しているといえる。

このような要点の後置を、轟(2014)はニュース番組の娯楽化と関連付けている。近年、テレビのニュースは、娯楽的な要素が強くなっている。このことは、構造的に要点を省略して後で述べるだけでなく、様々な言語現象として現れている。例えば、従来は用いられなかった体言止めが用いられるようになったことも、要点を後に回す現象として捉えることができる。要点の後置には、上に上げたような談話の構造的なもののみならず、様々な言語現象が含まれる。テレビのニュースにおいて娯楽的な要素が強くなるとともに、従来は見られなかった様々な言語現象が見られるようになっている¹²。

5.3 テレビニュースで代名詞が用いられるようにならないのはなぜか

テレビニュースにおける言語変化に伴い、従来は用いられなかった代名詞も、用いられるようになる可能性が考えられる。しかし、5.1 節で述べたように、現在のところ、代名詞の使用に関しては、テレビニュースに目立った変化は見られないようである。この理由は次のように考えられる。

5.2 節で述べたように、新聞とは異なるテレビニュースの言語変化は、ニュースの娯楽化によって生じている。これを踏まえ、まず、テレビの娯楽番組における代名詞の使用について見てみよう。ニュースのみならず、娯楽番組においても現在のところ代名詞はあまり用いられていない。このことから、ニュースの娯楽化によって代名詞が増えることは生じていないのだと言える。言い換えれば、代名詞の使用がニュースにおいて依然として見られないことは、ニュースにおける言語変化がニュースの娯楽化によって生じていることを示している。

まとめると、次のようになる。ニュースにおける言語変化の多くは、ニュースの娯楽番組化により生じている。娯楽番組においては、要点の省略と後置が生じており、これがニュースにも広まっている。一方、代名詞の使用は娯楽番組においても稀であり、ニュースにおいても稀であるという状況になっている。代名詞は日本語において有標の表現となっていると言える¹³。

5.4 娯楽番組における代名詞の使用例

前節で述べたように、現在のところ、娯楽番組においても代名詞の使用は稀である。このような状況の中で、ある娯楽番組(ドラマ)において、代名詞が頻出する現象が見られた。この節では、ニュース以外のテレビ番組における代名詞の出現例としてこの番組を取り上げ、代名詞を使用する目的の一つを指摘し、代名詞の使用が今後ニュースにおいて広まる可能性について検討する。

次の例は、あるテレビドラマ中での代名詞の使用の例である。このドラマは、「フランケンシュタイン」を題材としたストーリーである¹⁴。このドラマの設定では、一度死んだ若者が、科学者である父親の手で蘇らされ、120歳まで孤独に生きた後、現代の社会で、津軽継実という女子大生と出会う。継実は、菌の研究をしている鶴丸教授のもとで学んでいる。継実と出会った120歳の男性は、「深志研」という名前をもらい、人間社会で生活するようになる。

このドラマにおいては、代名詞の「彼」のみが頻出している。その指示物は、常に「深志研」である。次に挙げるのは、「彼」の使用が見られた場面の一つである。

(26) 継実： どうして先生、分かったんですか？なぜ原因は彼にあると思ったんですか？深志研さんに。

鶴丸教授： 状況から考えてもその可能性は高いと思った。

聖哉（継実の先輩）：これが、彼が寝ていた布団からはえてきたものだ。彼がしめじを食べたから、このような菌が生まれてきたと思うんです。

（「フランケンシュタインの恋」第2回、2017年4月30日放送）

このドラマの例における「彼」の指示物は、次のような特徴を持つ登場人物である。

- ・一度死んで生き返った
- ・年齢は 120 歳
- ・社会との関わりをずっと絶ってきた

この人物を指して「彼」がしばしば使われているということは、日本語の代名詞の用法の一つを示しているものと思われる。この指示物は、ファンタジーの世界における特殊な登場人物であり、話者（大学生の継実や聖哉）の属している社会に属する人物とは異なっている。この場合、代名詞「彼」の使用は、その指示物（深志研）が話者の属している社会の外にいるということを示すものだと考えられる。これは、本論文の3.2節で指摘した(18)にしたがう用法（情報のなわ張りを示す用法）とは一見矛盾する。したがって、このドラマに見られる代名詞の用法は、情報のなわ張りに関する代名詞の用法とは別の用法と考えたほうがよいと思われる。

3節で指摘したように、日本語における代名詞「彼」「彼女」は、幕末から明治期に西欧語の三人称代名詞の訳語として当てられたものである。西欧語の三人称代名詞は、名詞代用表現として用いられる。一方、Noguchi (1997) は、日本語の代名詞は英語とは解釈が異なり、単なる束縛変項としては解釈されないとしている¹⁵。そうであるとすれば、日本語において代名詞「彼」「彼女」によって指示物を指すという行為自体がもともと日本語におけるものではなく、英語から来たものであることになる。よって、これを行うことは、異国的な雰囲気につながる可能性がある。言い換えると、名詞代用表現として「彼」「彼女」を用いることが、本来の日本語の用法ではないため、翻訳的な言い回しを用いているという効果を生み、異国的な雰囲気につながるのではないかと考えられる。このような雰囲気を生み出すため、ドラマ「フランケンシュタインの恋」では、話者とは違う世界に属する指示物に対し代名詞「彼」を用いている、と言うことができる。これは、代名詞「彼」「彼女」による指示が、元来日本語におけるものではないことが意識されている用法であると言える¹⁶。

5.5 ニュースにおける代名詞の出現

上のことを示すものとして、ニュース番組中でのレポートの中での代名詞使用を挙げることができる。国際的な事象に関するレポートの中で、代名詞の使用が観察される。一例として、伝統芸能に携わる韓国の82歳の女性に関するレポートの中で、この女性を指して「彼女」の使用が見られた。（「キャッチ！世界のトップニュース」NHKBS1、2017年11月16日放送）このような、国際的な出来事や問題などを扱ったものの中で、そこに登場する人物を指して代名詞を用いることは、前節で述べた、代名詞の使用の要因と一致する。すなわち、3節で指摘したように、「彼」「彼女」によって指示物を指すという行為自体がもともと日本語におけるものではなく、英語から来たものである。よって、これを行うことが、異国的な雰囲気につながる。言い換えると、名詞代用表現として「彼」「彼女」を用いることが、翻訳語を用いていると

いう効果を生み、異国的な雰囲気につながるのではないかと考えられる。彼」「彼女」による指示が、元来日本語におけるものではないことが意識されている用法であると言える。

現在のところ、このような代名詞の用法は、ニュース番組においてはレポートに主に見られるが、通常のニュースにもこの用法が広がるかどうか引き続き注視する必要がある。

5.6 新聞における代名詞の出現

先に述べたように、新聞においては、コラムなどを除いて代名詞の使用は従来見られなかった。しかし、新聞においても 5.5 節で述べたテレビニュースにおける現象と類似の現象の出現が最近観察された。

(27) 日本語が得意な中国人女優、李香蘭——。戦前・戦中の大陸で日中友好をうたう国策映画などに出て大人気を博した彼女は、日本人だった。

(「紙切れ 1 枚 運命分けた『2 人のヨシコ』『朝日新聞』2019 年 7 月 28 日 1 面、下線は筆者)

この記事、及び同紙の 30 面に掲載された関連記事においては、代名詞「彼女」が多く使われている。その指示物は、「李香蘭」(山口淑子氏)、及び「川島芳子」である。戦前から戦後にかけて、日中の複雑な関係を背景に生きた二人の女性に関する記事である。

この記事は、「プレミアム A」と名づけられた新企画の記事として掲載されたものである。この企画について次のように紹介されている。

歴史も国境も越え、あらゆる分野に深く切り込みます。よりすぐりのニュースや物語、ルポルタージュを、紙面とデジタルで伝える新企画「プレミアム A」。

(『朝日新聞』2019 年 7 月 28 日 30 面)

この企画の記事「紙切れ 1 枚 運命分けた『2 人のヨシコ』」において、代名詞「彼女」が多く使用されていた。

この記事において代名詞が出現していることは、本論文の議論を用いれば、二つの点から説明できる。まず、この記事の内容は、新聞発刊時に近い日時に起きたことの報道ではなく、歴史的な出来事を解説するものである。したがって、「物語」に近いものであると見ることができる。物語において代名詞が使われることがあるのと同様に、この記事においても代名詞が用いられている。

二つ目に、話題が国際的なものであるという点では、5.5 節で述べたテレビニュース番組中での国際的なレポートと類似したものであると言える。このような話題では、新聞においても代名詞が出現しているということは、本論文での議論を支持するものと言えるかもしれない。先に述べたように、日本語において代名詞「彼」「彼女」によって指示物を指すという行為自体がもともと日本語におけるものではなく、英語から来たものである。よって、これを行うことが、異国的な雰囲気につながる。名詞代用表現として「彼」「彼女」を用いることが、本来の日本語の用法ではないため、翻訳的な言い回しを用いているという効果を生み、異国的な雰囲気につながるのである。これは、代名詞による指示が、元来日本語におけるものではないことが意識されている用法である。この用法が、新聞記事にも現れている。

6. 結論

日本語のテレビのニュース番組で用いられる言語には、従来見られなかったような現象が見られる。このため、テレビニュースで用いられる言語は、新聞で用いられる言語とは異なる特徴を持つようになっている。本論文では、日本語のテレビニュースにおけるこのような近年の言語変化を踏まえ、日本語の代名詞の使用に関してもテレビニュースにおいて新聞記事と異なる現象が見られるかどうかを考察した。

従来、日本語の新聞やテレビのニュース番組において、代名詞が使用されることはほとんどなかった。新聞においては、この点は近年も変わっていない。一方、テレビニュースにおいても、代名詞が用いられないという点では変化がなく、この点で新聞記事と同じ状況となっていることが分かる。他の点でニュースにおける言語が大きく変化していることを考えると、このことは大変興味深い。

テレビニュースにおいて代名詞が用いられないという状況は、次のように説明できる。ニュースにおける言語変化には、ニュースの娯楽番組化という要因が関わっている。娯楽番組において、現在のところ代名詞の使用はあまり見られない。このことにより、ニュースにおいても代名詞が用いられない状況が続いていると考えられる。

一方、多くはないながら娯楽番組において生じる代名詞の使用例を見ると、日本語における代名詞の違和感を使って特定の雰囲気を生み出すという効果を目的としているように思われる。そして、その影響が、既にドキュメンタリーやニュース番組中のレポートにおいては観察される。このことが通常のニュースにも影響を及ぼしていくかどうか、今後の継続的な観察が必要である。

註

- 1 本論文では、特に注記しない場合、「代名詞」は人称代名詞を指す。
- 2 本論文中のニュースの例は、NHKで放送されたものである。NHKの分類では、放送するプログラム全体を、「ニュース」とそれ以外のプログラムに二分し、「ニュース」以外のプログラムを「番組」としているが、本論文では、「番組」という語を「テレビで放送されるプログラム」という一般的な意味で用い、ニュースを扱っているプログラムを「ニュース番組」と呼ぶことにする。
- 3 調査の基となったデータの詳細に関しては、轟（2014）を参照されたい。
- 4 「彼」のほうは、表現自体は、人やものを指す表現として古くから存在していたが、これを西欧語の三人称男性代名詞の訳語として当てたものである。
- 5 記号<>は原文のままである。
- 6 神尾によれば、「Xの情報のなわ張り」のXは話し手または聞き手であることから、情報は話し手の情報のなわ張りに属するか否か、聞き手の情報のなわ張りに属するか否か、ということになり、状況の可能性は、4通りになる。(12a)は、この4通りの状況のうち、情報が話し手の情報のなわ張りに属するが聞き手の情報のなわ張りに属さないという状況に当てはまる。(神尾 1990: 22)
- 7 神尾によれば、語句の表わす情報の遠近は(12)のような文全体の表わす情報の遠近とは全く独立のものである。
- 8 話し手と指示物の個人的関係が万一あったとしても、そのことを示すことは通常行われないうであろう。

9 日本語の代名詞に関わるその他の現象も、轟（1998）は（18）により説明している。対象の *identity* を尋ねる疑問文には使いにくいという点に関しては、以下の通りである。

- i. a. ?*彼はだれですか？
b. ?*彼らはだれですか？ [= (8)]

だれかわからない人が話し手の情報のなわ張りに属することはない。（18）により日本語の人称代名詞は、その指示物に関する情報が「話し手の情報のなわ張り」に属することを標示するので、代名詞を使ってある人物を指しながらその人物が誰かと尋ねると矛盾が生じることになる。なぜなら、話し手の「情報のなわ張り」に属している人物について話し手はそれが誰か当然知っているはずだからである。よって、日本語の代名詞は対象の *identity* を尋ねる疑問文には使いにくいことが説明され得る。

日本語の代名詞が地位のより高い指示物には用いられないという点に関する説明は、以下の通りである。この現象も（18）により説明できる。親しい友人とは違い、地位のより高い人の場合は、たとえ知っている人であってもあまり親しげに接すると非礼になるので、話し手はその人が自分の情報のなわ張り外にあるように接する必要があると考えられる。地位のより高い対象に代名詞を用いるとその人物が話し手の情報のなわ張りに属すかのように述べることになり、非礼になると考えられる。そこで代名詞の使用は避けられ、代わりに「先生」「課長」のような名詞によって指示されると説明できる。いいかえれば、指示物から距離を置くことによって、話者は丁寧な表現を生み出しているのである。距離を遠くすることによって丁寧な表現になるというこのような装置は、言語一般に見られるものである。例えば、よく知られているように、時制を過去にすることによって丁寧な表現になる。（ii）（iii）では、現在の気持ちを表す際現在形を使わず時制をずらして過去にすることによって丁寧な表現になっている。

ii. Did you want to see me now?

(グリーンバウム、クワーク 1995: 88)

iii. 山田さんにお会いしたかったんですが。

(轟 1998: 84)

同様の言語装置の一つとして、日本語では代名詞を避けることが一般化していると考えられる。すなわち、代名詞は（18）の機能的特性をもつため、話者は代名詞を避けることにより指示物から距離を置き、丁寧な表現を生み出すことができるのである。

10 行方不明の船長の名前の漢字は、「ニュースウォッチ 9」の画面の字幕では「義澤宏志さん」となっていたが、この新聞記事中では「義沢宏志さん」となっている。（22）では、新聞記事に従った表記にしてある。

11 「要点の省略」以外の言語現象に関しては、轟（2007, 2008, 2014）を参照されたい。

12 詳しい議論については、轟（2014）を参照されたい。

13 轟（2000）は、英文を日本語訳する際にも、日本語として自然な翻訳を行うためには、英語の代名詞の訳として日本語の代名詞を使うことを可能な限り避ける、という制約に従う必要があることを指摘している。

14 イギリスの小説家メアリー・シェリーによる作品『フランケンシュタイン』（1818）においては、元々「フランケンシュタイン」は怪物を造る科学者の名であったが、後に、怪物を意味する表現としての「フランケンシュタイン」の用法が生まれた。

15 Noguchi（1997）によれば、日本語の代名詞は名詞であって束縛変項とは解釈されない。

16 轟（2000）は、英語の代名詞の日本語訳に関する議論を行い、次のような制約を提案している。「他の可能な訳語が存在する場合、代名詞は避ける。」このように、日本語では基本的に代名詞を使わない、という基準が存在するとすれば、本論文で主張する代名詞使用の効果は、基準を破ることによる特殊な効果とも言える。

参考文献

- グリーンバウム, シドニー、ランドルフ・クワーク (1995) 『現代英語文法大学編 新版』池上嘉彦・他訳、紀伊國屋書店。
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』大修館書店。
- 柏崎敏 (2013) 「どう書くか 沈黙の1年」朝日新聞 (石川) 2013年11月30日21面。
- Kuno, Susumu (1987) *Functional Syntax: Anaphora Discourse and Empathy*, University of Chicago Press, Chicago.
- 増田一夫 (1995) 『『現在』のナルシシズムに抗して』小林康夫編 『知の論理』東京大学出版会、227-237。
- 中村捷、金子義明、菊地朗 (1989) 『生成文法の基礎——原理とパラミターのアプローチ』研究社。
- 日本大辞典刊行会 (1973) 『日本国語大辞典』小学館。
- 日本国語大辞典第二版編集委員会 (2001) 『日本国語大辞典第二版』小学館。
- Noguchi, Tohru (1997) “Two Types of Pronouns and Variable Binding,” *Language* Vol.73, 770-797.
- 澤田治美 (1993) 『視点と主観性-日英語助動詞の分析-』ひつじ書房。
- 轟 里香 (1998) 「人称代名詞における日本語と英語との相違—機能的観点から」 *Kansai Linguistic Society Proceedings* 18、78-88。
- 轟 里香 (1999) 「日英語の人称代名詞の使用に関する一考察」『北陸大学紀要』第23号、259-269。
- 轟 里香 (2000) 「英文和訳における問題点—代名詞を中心に」『北陸大学紀要』第24号、205-215。
- 轟 里香 (2007) 「映像メディアで使用される言語の変化—英語学習者に対する影響」『北陸大学紀要』第31号、125-135。
- 轟 里香 (2008) 「ニュース番組で用いられる言語の変化について」『北陸大学紀要』第32号、121-133。
- 轟 里香 (2010) 「ニュース番組の相違が言語に及ぼす影響」『北陸大学紀要』第34号、99-109。
- 轟 里香 (2011) 「ニュースの内容による言語的相違」『北陸大学紀要』第35号、1-12。
- 轟 里香 (2013) 「ニュースにおける省略と後置」『北陸大学紀要』第37号、169-181。
- 轟 里香 (2014) 「テレビニュースにおける言語現象とその要因に関する一考察」*Osaka Literary Review* 第53号、33-54。
- 轟 里香 (2015) 「ニュースで使用される言語における要点の移動について」『北陸大学紀要』第40号、41-53。